

HÔTEL DES AMÉRIQUES

〈カラー作品

配給/ヘラルド・エース 日本ヘラルド映画 海辺のホテルにて

カトリーヌ・ドヌーヴ パトリック・ドヴェール 監督 アンドレ・テシネ 音楽 フィリップ・サルド



Herald

ヘラルド CLASSICS クラシックス作品

大西洋に面したフランス西南のひっそりしたリゾート、ビアリッツ。人気の途絶えた冬の港町で過去を捨てきれない女と、孤独な男が出会った。2人の恋を邪魔するものはなにもなかったはずなのに、なぜか2人はためらいちゅうちょする。2人とも愛で傷ついた経験をもっていたのだ。

カトリーヌ・ドヌーヴが久しぶりにしっとりした大人の恋物語を演じて、好評だったフランス映画。監督、脚本はアンドレ・テシネ。日本では初お目見得だが、イザベル・アジャーニの『バロッコ』や、イザベル・ユペールの『ブロンテ姉妹』などで、フランスでは気鋭の監督である。 音楽は名手フィリップ・サルド。 撮影はブリュノ・ニュイッテン。ビアリッツのオール・ロケの効果が美しくスクリーンに生かされている。なお、相手役のパトリック・ドヴェールはジェラール・ドパルデューとならぶ人気実力派の俳優だったのだが、彼は82年、遺書も残さず拳銃自殺した。「男と女」から20年、フランス映画はこうしたムーディなラブ・ストーリーに非凡な伝統を見せる。

77 活 パリから列車で10時間あまり、スペイン国境に近い海辺の町ビアリッツは静かなリゾートとしてフランス人に人気があった。映画は夏のシーズンが終わり、冬に向う晩秋に始まる。人気の途絶えたリゾートは淋しい。人のいない浜辺、客のいないホテル。賑いの消えたレストラン。こんなとき人は何故か人恋しくなるもので

ある……。

エレーヌ (カトリーヌ・ドヌーヴ) は深夜勤務を終えてアパート に車を走らせていた。疲労もあったのだろう、ちょっと注意力が散漫になったのか、車の前を横切る人影を見つけたときは遅かった。車脇にその人物は倒れた。男の名はジル (パトリック・ドヴェール)といって、彼の母親が経営する小さなホテルの息子だった。幸い怪

我はなかった。

心配するエレーヌに向ってジルはこう言った。「この町には 6 人の美女がいるけど、7 人目が見つかったね」

ジルはエレーヌに一目惚れしたのである。

しかしエレーヌは、ジルの愛を受け入れることをためらい、迷う。彼女は最愛の恋人を海の遭難で失っていた。建築家だったその恋人との思い出があまりにも楽しく、あまりにも美しかったために、エレーヌは今は心をしっかりと閉ざしてしまっていたのである。

しかし、ジルは一途に純粋にエレーヌの心を叩く。悲しみに沈ん でいたエレーヌも、その熱意に、次第に心がやわらいでいった。

エレーヌはある日曜日、郊外の大きな田舎の館にジルを案内する。かつての恋人との愛の巣だった。彼女は、その館にしっかり錠をかけることで、過去を封じておいたのだ。いま、ジルという新しい恋人のためにその扉を開ける。こもっていた勾いが鼻をつき想い出は窓から、扉から流れ出していくように思えた。ジルは、そのガランとした空間にエレーヌと前の恋人との緊密な愛を見たのか、複雑な気分を抱えたまま帰っていった。

エレーヌはジルに心をひらいたものの。まだ、海で溺れ死んだ恋人のことを忘れていない、とジルは思ってやりきれなかったのだ。彼女に完全に忘れさせるために、彼はエレーヌを小さな旅に誘う。しかしエレーヌは彼の申し出も素直に受けるわけにはいかなかった。ためらい、迷う二人の恋。ジルには一人親友がいた。ベルナールというこの男は実は定職を持たない風来坊だった。ギターの弾き語りをしては、わずかの生活費を稼ぎ、いつかはニューヨークに出て一流のミュージシャンになるんだというのがログセである。彼はジルの妹のエリーズに気があるのだが、エリーズはてんで、受けつけない。季節が変わった。春の陽光が、この港町にふりそそぐと、エレーヌの気持も、新しい季節に応えるかのように変わっていった……。